

空想的社会主義と近代スピリチュアリズムのあいだ

津城 寛文

空想的社会主義の歴史の末尾でときおり言及されるフェビアン協会(一八八四年結成)は、バーナード・ショアの参加と自己宣伝によって、広く知られている。その名称は、古代ローマの将軍ファビウスがカルタゴの将軍ハンニバルを持久戦法で悩ませた故事に因み、若い知識人たちの漸進主義の理想を表現したものとされる。命名者はフランク・ポドモアであった。このポドモアはまた、近代スピリチュアリズムの伴走者である心靈研究協会の設立(一八八二年)に、最若手の一人として参画した人物でもあり、のちに大部の『ロバート・オーウェン伝』(一九〇六)もまとめている。そして当のオーウェンも、最晩年のスピリチュアリズムへの傾倒がしばしば言及される。その他、アンナ・キングズフォードやアーニー・ベザントといった、のちに神智学協会の第二世代を代表することになる女性たちも、一時期フェビアン協会で自らの道を模索していた。空想的社会主義と近代スピリチュアリズム、神智学協会その他は、一見別物ながらこのように所々で接点がある。

資本主義の興隆期にほぼ同時に現われた近代スピリチュアリズムと近代マテリアリズムは、互いの反転像と言われるように、世界観としては真逆の思想として表現されながら、政治経済思想としては、どちらも社会主義の傾向を帯びていた。近代スピリチュアリズムと社会主義の連続は、空想的社会主義という接点に、見えやすい形で辿ることができる。それが示唆するのは、新たな社会の構想と、新たな信仰の探究は、不可分の関

係にあり、新たな社会はより高い規範を必要とする、ということである。

「監獄的」「恐怖政治的」等々と形容された社会主義・共産主義の実験が一九九〇年以降次々と自壊し、今また「略奪的」「カジノ的」等々と形容される金融資本主義の実験が自壊しようとしているとき、随所で模索されているのは、いったんは片隅に追いやられたそのような社会秩序と宗教信仰の改訂作業のようである。

空想的社会主義においても、近代スピリチュアリズムにおいても、「善い社会」のビジョンがさまざまに展開されている。このビジョンを最も大きな尺度で考えるに際して、二つの軸が浮かび上がってくる。一つは、宇宙全体を支配する原理を、善意と見るか否かという軸。もう一つは、死者の居場所を考慮するか否か、という軸である。ユートピアンは、定義上、多様性の度合いは異なっても、宇宙全体を支配する善意の秩序があると確信している。ダンテからスウェーデンボルグ、スピリチュアリズムまでは、これも定義上、死者の存在を前面に出している。

この二軸を組み合わせると、特徴的な四つの世界観が現われる。一つめは、悪意の抑圧(あるいは善意の不在)が支配する、生者だけの世界。二つめは、悪意の抑圧(善意の不在)が、現世も来世も支配する世界。三つめは、善意の秩序が支配する、生者だけの世界。四つめは、現世も来世も、善意の秩序によって支配される世界である。一つめと二つめを、「善い世界」と考える人はないが、三つめと四つめには、それぞれを「善い世

界」と考える人がいる。なお、現世と来世で秩序の善意と悪意が異なるとする思想もあり、たとえば現世は邪悪な秩序が支配し、来世を善良な秩序が支配している、と考えたり（グノーシスの一部など）、現世は楽しく、来世は暗い世界である、と考えたりする（古代ユダヤなど）。

「善い社会」の思考実験が教える教訓は、全体社会の最低限の秩序（合法性）を裏付ける最終的な審級が求められ、それは「人類」「新」「普遍」「宇宙」等々の形容詞を持ちながら、「宗教」と呼ばざるを得ないようなものとなる、ということである。

インターネットにみる流行神

——中国の「受験の神」をめぐる——

黄 緑萍

中国では、インターネットの普及により、そのユーザー数は現在五・三八億にも上るといふ。インターネットは、あらゆる分野に大きな影響を及ぼしており、もちろん宗教もその例外ではない。二〇〇九年、女性歌手の李宇春をモデルに作られた「春哥」という「受験の神」がインターネットに現れた。二〇〇五年八月、二十一歳の李宇春は、湖南テレビの歌謡コンテスト「超級女声（スーパースター）」で優勝した。彼女はその後、ポップス歌手として活発な活動が続けているが、二〇〇八年になると、彼女に因んで、「春哥」（日本語の意味は「春兄」）及び「春哥を信じれば試験に落ちない」などの文句がネット上で流行り出した。さらに翌年にはウェブサイト「豆瓣網」が登場し、その中の「春哥廟」と称する祈願サイトには、現時点まで

七千件以上の祈願が掲載され、その大半が受験に関する祈願であった。「春哥」の出現を皮切りに、以後「範進」、「考神」など「受験の神」と呼ばれる神々がインターネット上に次々と現れ、人々の祈願対象とされると同時に、メディアからも注目を集めていった。

これらの「受験の神」に関しては、新たな社会現象として中国の学者が関心を寄せている。しかしその流行の過程とメカニズムに言及する研究は、管見の及ぶ限りまだ現れていない。本研究は、この一連の「受験の神」をインターネット時代の流行神として取り上げ、宮田登により提唱された流行神の定義に則り（宮田登「流行神」大塚民俗学会編『日本民俗事典』一九七二、五八四）、先行研究（宮田登『近世の流行神』一九七二、鈴木弓『「流行神」の形成とその展開に関する実証的研究——中国地方の事例を中心に』一九九二）によって指摘された、従来日本に見られてきた流行神現象と比較しながら、中国における「受験の神」の展開過程や特徴を明らかにし、インターネット時代における流行神の特徴と信仰の傾向を考察したものである。

具体的には「受験の神」とされる神々の展開過程をまとめ、「春哥」に対する祈願の件数、行為、内容をめぐって考察を行った。これをこれまで宮田と鈴木により報告された従来の流行神と比較した結果、中国の「受験の神」の特徴は以下の三点にまとめることができた。（①急速なやりと数多くの祈願者）どの祈願サイトも開設された後すぐに非常に多くの人々により、数多くの祈願が書き込まれ、急速に流行り出した。その